

湯河原は古くは万葉集にも詠まれた温泉保養地として知られ、明治から昭和にかけて多くの文化人が静養に訪れています。当館は、作家の夏目漱石や近代日本画の巨匠・竹内栖鳳らが逗留した老舗旅館を改装してできた美術館、コレクションはその歴史に由来しています。一方、現代日本画家・平松礼二の作品を多数収蔵し、その作品を展示する「平松礼二館」、公開アトリエや資料室があります。これら収蔵品の展示に加えて、特別展や現代作家展などの展覧会を開催しています。



2025年3月27日(木)~7月14日(月)

■平松礼二館 フランスをはじめ、国際的な活躍をみせる現代日本画家・平松礼二(ひらまつれいじ 1941~)の作品を紹介する展示室。テーマを設けた企画展を開催しています。

## アジア・アメリカ・ヨーロッパ

旅をすることで描き、描くことでまた旅をする、といっても過言ではないほど、画家・平松礼二にとって旅は重要な行為といえるでしょう。20代の頃に始まり現在まで平松がたどってきたこれまでの旅路を、アジア、アメリカ、ヨーロッパと大きく三つに分け、画家のわけのいい土地とその体験を通して描かれた作品を紹介します。



《メキシコ風景》1969年 寄託

7月18日(金)~10月20日(月)

## 写実と幻想の風景画

平松はこれまで故郷の哀愁を帯びた情景や身近な自然、都市のビル群など多くの風景を描いてきました。作品は、現地での写実的なスケッチからアトリエでの制作過程の中で自身の感性を投影させ、理想や追憶など多くの思いを風景の中に反映させています。実風景からどう変化したのか、作家のどのような心理を投影させているのか想像してみませんか。



《ジヴェルニー村》2012年

10月24日(金)~2026年2月2日(月)

## 湯河原十景 +

2016年から平松は「残したい風景」として湯河原町内各地をスケッチし、「湯河原十景」という作品群をまとめました。本画とスケッチ、16年以前に描いた湯河原の風景もあわせて紹介します。画家の目を通して描かれた湯河原は美しく、魅力を再発見できるのではないでしょうか。色彩豊かに描かれた四季の風景をお楽しみください。



《奥湯河原紅葉》2018年

2月6日(金)~4月6日(月)

## 原点と現在

愛知県立旭丘高校美術科在学中に川端龍子の主宰する青龍社展に初出品し、翌年の1961年同社の研究会に入門した平松。近代的空間にふさわしい大画面の日本画の確立を目指す同社の薫陶を若かりし頃に受けた平松の創作力は80代半ば近い現在も旺盛に続いています。平松の青年期と近年の作品とを一堂に展示し、50年以上にわたる画業の初期と現在との照射を試みます。



《路・土まんじゅう》1979年 寄託

## ●収蔵品展

近代日本画の牽引者・竹内栖鳳(たけうちせいほう 1864~1942)をはじめとして、後に栖鳳画室に移り住んだ日本洋画界の重鎮・安井曾太郎(やすいそうたろう 1888~1955)、戦中に湯河原に疎開したプロレタリア美術の中心人物・矢部友衛(やべともえ 1892~1981)、後半生を湯河原の隣町・真鶴で過ごした水彩画家の三宅克己(みやけこき 1874~1954)といった、この地にゆかりのある画家の作品を展示しています。

## I 期 (3/27~7/14)

- ・伊東深水《夕涼み》▶
- ・竹内栖鳳《水墨山水》ほか



1900年代 寄託

## II 期 (7/18~10/20)

- ・富田通雄《吉浜の夏》▶
- ・矢部友衛《橋のある風景》ほか



1955年

## III 期 (10/24~2/2)

- ・山下新太郎《薔薇》▶
- ・高木義夫《秋、暮れる》ほか



1900年代

## IV 期 (2/6~4/6)

- ・竹内栖鳳《宇佐幾》▶
- ・三宅克己《福浦》ほか



1939年頃

## ●第19回現代作家展

湯河原で創作を続ける2人の作家を紹介します。

3月27日(木)~5月13日(火)

## 宮川かず美 木彩画展

木が持つ色合いや木目を利用して図柄を表す木象嵌(もくぞうがん)という技法に魅了され、40歳を過ぎてから制作を始めた宮川。風景画や役者絵など、初期から近年作までを展示します。



《三曲合奏図》2020年

5月15日(木)~7月14日(月)

## 山田ひろし写真展「心の旅路」

情報網と行動力、そして独自の嗅覚で瞬間を切り取ってきた写真家の50年以上に及ぶ活動の集大成となる展覧会。日本国内やアジア諸国、南米などの風景を中心に紹介します。

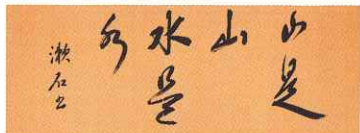


《夜明け》1982年

7月18日(金)~10月20日(月)

## むかし、旅館でした。

なぜ当館の建物は古く、天井は低く、展示室は細長いのでしょうか。当館を訪れた方がなんとなく感じられるこの種の疑問…当館は明治創業の老舗旅館「天野屋」の建物を改装した美術館ゆえ…。かつて旅館の敷地内に住居兼アトリエを構えていた竹内栖鳳の作品、宿泊した夏目漱石の書、牛田雞村が手掛けた旅館室内の舞台絵や襖絵など、当館の収蔵資料は旅館との関わりが深いものです。当館ならではのユニークな歴史をもつ作品を選びすぐて紹介します。



夏目漱石《山は山水是水》1916年 寄託

10月24日(金)~2026年2月2日(月)

## 『橋のない川』さしえ展

平松礼二は、30代の頃より新聞小説の挿絵や雑誌・書籍の表紙絵といった仕事も多く手掛けています。今回はその中から、住井すゑのベストセラー小説『橋のない川』(1992年 新潮社)によせた挿絵の原画を初公開します。墨で描かれた素朴な味わいのカット絵は、彩色豊かな大画面の作風で知られる平松の、また別の側面をみせてくれるでしょう。



《杵と臼》1991年頃 寄託

## ■平松礼二公開アトリエ

日本画材や制作途中の作品、スケッチなどをご覧いただけます。

※制作中やイベント開催時には入室いただけない場合があります。



## ■平松礼二資料室

平松礼二に関する新聞や雑誌の記事、美術コレクション等をご覧いただけます。



2月6日(金)~4月6日(月)

## ●特別展 龍子の衝撃

“日本画の革命児”と称される川端龍子(かわばたりゅうし 1885-1966)は、洋画研究のため渡米しますが、日本の古美術に感銘を受けたことなどをきっかけに日本画へ転向しました。院展の同人となり、団体の中心として活躍を期待される最中に脱退し、青龍社を創立、大画面による「会場芸術」を確立させます。龍子は、従来の枠にとらわれず、信念を貫く生き方やスケールの大きな作品で人々に強い衝撃を与えてきました。そして没後60年を迎える今もなお、その大胆な発想と筆致で構成された作品は私たち観るものを圧倒し続けています。挑戦を続けた画家の初期から晩年まで、選りすぐった作品と画業を紹介します。



川端龍子《臥龍》1945年 大田区立龍子記念館蔵